

宮城学院女子大学現代ビジネス学部における 産学連携事業の教育的効果の検証

～(株)東北協同事業開発との商品開発プロジェクトを事例として～

宮 原 育 子
渡 部 美紀子

はじめに

文部科学省は、2003年の科学技術・学術審議会技術・研究基盤部会の報告書の中で、「『知』の創造と活用を図ることに大きな価値が置かれる『知識社会』において、産学官連携は大学等の活性化と我が国の社会の発展に大いに寄与するものであり、その一層の充実強化が求められる」とし、特に国の科学技術発展に大学が資する役割の大きさを強調している。このことを背景に、文部科学省では、大学組織としての産学官連携を推進してきており、近年は毎年国公立大学等に対し「大学等における産学連携等実施状況について」という調査を実施している。2022年度では全国の1,076機関が対象となった。この調査では、主に企業からの研究資金等の受入や人事を含む共同研究の状況が報告されている。

しかし、本調査では、連携等における大学の教育面への効果について把握することはできない。先述の2003年における文部科学省の報告書には、産学官連携の大学教育に及ぼす効果について、「大学の教育の活性化に大いに資するものである。」と述べた上で、具体的には、「共同研究、インターンシップ等を通じての学生が企業と交流する機会を積極的に設けることや、産学共同による教育プログラムも開発や企業経験者の招聘など、大学教育の場において産業界の視点や協力を得ることは、実践的教育を推進し、産業界をはじめとする社会のニーズに応える人材を養成していく観点からも有効である。また、教員が産学官連携活動を通じて得た知見や経験は教育活動を通じて最終的には学生に還元される。」(文部科学省2003)としている。全国の大学の中には、規模や教育・研究の特性などにより、必ずしも定量的な調査の枠組みに当てはまらない産学官連携なども存在している。産学官連携について、筆者らはその内容と規模、研究の推進状況とともに、大学の学生たちに向けた教育面での評価も必要ではないかと考える。

東北地方においては、2011年3月11日の東日本大震災で、地域自治体や企業も大きな被害を受けたため、東北の大学を中心として、復興に向けた被災地支援の過程で、その規模、内容とともに多様な産学官連携のプロジェクトが生まれた。震災後、13年たった現在でも地元の大学は、著者

らの所属する大学を含め、様々なかたちで息の長い復興支援を続けており、それらが大学の教育の中で生かされている。

本研究では、社会科学分野を中心として教育を進めている宮城学院女子大学現代ビジネス学部における産学連携の事例として、(株)東北協同事業開発との商品開発プロジェクトの取り組み内容を紹介するとともに、産学連携の教育的な効果について卒業生へのアンケートや、企業へのヒアリングを通して考えていく。

1. (株)東北協同事業開発との産学連携事業の経緯

宮城学院女子大学の現代ビジネス学部は、2016年4月に創設され、主に地域のビジネスの現場において実践的な学びを進め、地域社会に貢献する人材の育成を目的にしている。新設の学部において、地域での実践的な教育を進めるための連携先を模索していたところ、2017年に、宮城学院女子大学を卒業した地元の情報系会社の経営者、東通インテグレート(株)代表取締役佐藤博美氏の尽力により、みやぎ生活協同組合を紹介いただくことができた。そして、組合からグループ会社のひとつである(株)東北協同事業開発を産学連携先としてお勧めいただいた。宮城学院女子大学の現代ビジネス学部では、地域観光ビジネスを担当していた教員と、会計学の教員がパートナーとなり、それぞれの教員のゼミナールに所属する2年生、3年生が連携事業に取り組むこととなった。

みやぎ生活協同組合は、1982年に仙台市内に創設され、現在宮城県内全域と福島県中通・浜通を事業範囲に持ち、2024年現在、約976,000人の会員と、1,362億円の事業高を持つ組織である。

(株)東北協同事業開発は、2015年4月に東日本大震災の復興と東北地方の経済活性化（主に販路拡大）を目的に、みやぎ生活協同組合とコープ東北サンネットの子会社として設立され、同年11月に「古今東北」ブランドとして食品の開発と販売を開始した。当初は38品目の取り扱いからスタートし、現在は約289品目まで拡大し、2023年度の売り上げは約20億円に達した。

連携事業は、社内役員を務めている古今東北事業部の取締役開発・営業部長の丹野氏と営業担当課長の斎藤氏が中心となって取り組むこととなった。

連携事業の内容としては、「女子大学」であることを生かし、若い女性目線での「古今東北」ブランド商品の提案や、既存の商品の評価（味やネーミング等）、(株)東北協同事業開発に関わる食品メーカーの試作品の評価などを行うこととなった。また、古今東北事業部からは、教育的側面から、大学生の理解を進めるためのマーケティングや商品流通の講義をいただくことになった。

事業は、2017年6月からスタートし、新型コロナウイルス感染症拡大の時期を含め、7年にわたり、毎年2つのゼミに所属する学生たちが参加した。

2. これまでの産学連携活動の実績

2.1. 2017年から2019年、2023年、2024年の主な産学連携の活動

2017年から始まった、「古今東北」の連携事業は、毎年大学の単年度となる1年を通して行われ

図表 2.1 (株)東北協同事業開発と大学との連携事業

古今東北における産学連携事業の内容			
連携の プロセス	時期	主な産学連携事業内容	
		(産) 古今東北	(学) 宮城学院女子大学
①	春	古今東北の事業と商品開発に関する講義、新商品開発の条件提示	企業の理念や想い、事業内容、マーケティングや商品流通の理解
②	夏	随時学生たちへの情報提供	新商品に関する情報収集、売り場調査、提案の検討、プレゼンテーション資料の作成
		商品提案の講評、フィードバック	古今東北商品の提案、プレゼンテーション、プロの目からみた自分たちの提案の評価を受ける
③		提案商品の商品化の可能性について、メーカーとの協議	
④	秋	これまでの商品化の取組みの状況の説明、メーカーとともに試験商品の試食会の開催	メーカーの商品の概要を理解する、試食をしてその評価や所感を作成し、企業に送る
⑤	冬	逐次、商品化された提案の報告や情報提供	商品提案の高度化を目指した議論やさらなるアイデアの検討

ている。図表 2.1 は、2017 年からコロナ禍前の 2019 年までと、コロナ禍後の 2023 年と 2024 年の活動のプロセスと、(株)東北協同事業開発 = 「企業」側の取り組みに対し、宮城学院女子大学 = 「大学」がどのように取り組んだかについて、年間のおおよそのスケジュールをまとめたものである。

①毎年 5 月ごろに始まり、まず、企業から講義と資料の提供を受け、「古今東北」事業誕生の経緯や理念、そして震災復興に関わるミッションを講義していただいている。その中で、「古今東北」の商品開発が単なる商品に関わるだけでなく、震災で被災した生産者の販路拡大を考えていくことの必要性を学び、またその事業が被災地のみならず、東北全体に展開していることも説明される。商品開発を進めるにあたってのマーケティングの知識や「古今東北」における商品流通の専門的な講義も受けている。企業からは、商品開発の前提条件が提示され、学生たちは、グループに分かれ、夏までに講義で受けた知識をもとに、食品や商品のトレンドなどの情報収集や、スーパーマーケットでの売り場の観察などを経て、アイデアを練っていく。

②7 月ごろには、グループごとに古今東北事業部の丹野部長と斎藤課長に対し、複数品目の商品アイデアのプレゼンテーションを行い、プロの目からみた学生たちのアイデアに対するフィードバックをいただき、作成したプレゼンテーションの資料を提出する。これは学生たちが企業の真剣な思いを実感する機会にもなっている。

③企業はプレゼンテーションをもとに、学生の提案商品の実現可能性を検討し、メーカーなどに情報収集や照会を行う。

④秋には、企業が学生の提案商品の実現状況について説明を行い、場合によってはメーカーを招



写真1 ②大学での商品提案プレゼンテーション
2024年7月筆者撮影



写真2 ④大学でのメーカーとの商品の試食
2024年10月筆者撮影

いて、商品の試食を学生たちと行う。また、若い購買層の反応をメーカーにも知ってもらう機会としながら、さらに商品の実現に向けて企業内で検討を進めていただいている。

⑤冬には、企業がこれまでの商品化の状況と今後の予定について説明を行い、大学側とともに学生たちの取り組みの成果について確認を行って、次年度の活動に向けて準備を進めることとしている。

このように、2017年から2019年までは、毎年学生の商品提案と商品化実現の取り組みを進めてきた。(株)東北協同事業開発との「古今東北」ブランドの商品開発は、この時点で、カステラやバームクーヘン、ふりかけやポン酢などの6種類が、学生との共同開発商品として誕生した。商品ラベルには、(株)東北協同事業開発と宮城学院女子大学の学生との共同開発であることの明示と学生たちの写真も印刷されており、学生たちは事業に携わったことの喜びを実感することができた。

2.2. 2020 年～2022 年 新型コロナウイルス感染症拡大期における産学連携の工夫

2020 年 3 月には、同社との連携協定も締結され、さらなる商品開発を進めていた。しかし、2020 年 4 月から迎えた新学期は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、授業が遠隔になるなど学生の活動が大きく制限されることとなった。このため、これまでのように新商品の開発を進めることが出来なくなり、新たに「おうちで COCON」の活動を開始した。この活動結果については、報告書として『MG おうちで COCON レシピ集』として製本化した。同書では、巻頭言において、次のように記している。

学生が大学に来られない状況の中で、自宅に居ながらインターネットで「古今東北」のコンセプトや商品のラインナップを学び、幅広い観点からプロモーション活動を考える活動を模索しました。その結果、5 月から古今東北商品を 1 点以上使った料理レシピを考案する仕組みを開始しました。レシピは学生自身が自宅で実際に調理をして作成することとし、6 月にはゼミ生から 40 以上のレシピが集まりました。（宮城学院女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科（2021）『MG おうちで COCON レシピ集』はじめに）

その後、(株)東北協同事業開発の丹野部長をはじめ、社内の皆さまのご協力のもと、レシピ内容を審査、9 月にはコンテストの表彰式を開催して、学生の活動が制限された中でも大きな学びを得ることができた。また、みやぎ生活協同組合（2020）の広報誌で「MG おうちで COCON レシピコンテスト開催！」として（『COOP SCOOP』9 月号、Vol.3, 9-10, 写真 3）、また、情報誌『りらく』の 2023 年 4 月号で「宮城学院女子大学現代ビジネス学部生考案 古今東北商品を使用したオリジナルレシピ」として取り上げていただいた（りらく 2023, 58-59, 写真 4）。

この活動は、新型コロナウイルスの感染が収束する 2022 年度まで行われ、レシピ集の発行は 3



写真3 1回目のコンテストの様様
『COOP SCOOP』2020 年 9 月号, Vol.3, 9-10



写真4 3回目のコンテストの様様
『りらく』2023年4月号, Vol.296, 58-59



写真5 コンテストの作品を紹介するレシピ集



写真6 「古今東北」の活動を紹介する書籍
(西村 2021)

『MG おうちで COCON レシピ集 1-3』

冊を数えている (写真5)。

さらに、「古今東北」の商品開発活動を、生産者の方々への取材を含めて紹介された『あしたへつなぐ おいしい東北 古今東北のチャレンジ』(西村 2021, 178-190, 写真6)においても、「おうちで COCON」の活動を取り上げていただき、活動した学生の大きな励みになった。

2.3. 商品開発事業から発展した様々な産学連携活動

2023 年からは、2.1 で示した通り、対面で引き続き「古今東北」の商品開発の取り組みを進めている。2017 年から 7 年間の産学連携の中では、商品開発のみならず、様々な活動を展開した。「古今東北」の商品販売実習は、2017 年に仙台駅に隣接するアエルの催事場で学生たちがプロの販売員の方より指導を受けながら、一般の来訪者に商品を説明し、販売する体験をした。また、2017 年、2018 年の冬には、大学で開催した「クリスマスマーケット」の「マルシェ」において、学生たちが共同開発した商品を中心に仕入れ、会場での販売を行い、来訪者や教職員、学生に広く、産学連携事業の存在を周知することができた。

(株)東北協同事業開発においても、2018 年、2019 年に、組合員を対象とした、「古今東北」の試食会に学生たちを招いてくださり、東北各地の生産者の方に商品の説明を受けたり、試食をする貴重な機会をいただいた。また、「古今東北」のメーカーやバイヤーなどの関係者を招いた交流会でも、学生たちの商品開発の取り組みの報告の機会を設けていただき、このイベントも東北各地の食品メーカーと学生たちが出会い、様々な情報を収集することができた。

さらに、大学サイドでは、学生たちと「古今東北」の商品生産地を訪問する課外研修を実施し、2018 年 2 月には、大震災の津波被害の様子が残る宮城県気仙沼大島のゆずの栽培農家を訪問した。また、2024 年 8 月には、岩手県陸前高田市において、国立震災復興祈念公園を訪問した後、地元の総菜製造者と、宮城県南三陸町の味付け海苔のメーカー及び、コマツナなどの野菜の生産者を訪問した。訪問の際には、(株)東北協同事業開発の丹野部長も同行してメーカーと学生たちの調整をしていただいた。学生たちは実際に生産者と出会い、商品の原材料や製品が製造する過程を現地で学ぶことができ、その後の商品開発等にその知見を活かすなど、学生の教育的な効果も大きかった。

2024 年 11 月には、大学側で、南三陸町の野菜生産者の野菜を使った料理の実食を仙台市内のホテルで企画した。イベントには学生とともに(株)東北協同事業開発の丹野部長と開発担当課長の鈴木氏を招き、ホテル側が考案した料理を味わいながら、「古今東北」の商品が生産から加工、消費までの一連の動きをたどることができる機会となった。また、実食イベントを引き受けたホテル側においても、若い女性向けの野菜レシピを考案するなど、レストランのビジネスに参考になる活動として喜ばれた。

継続している事業としては、インターンシップがある。(株)東北協同事業開発では、学生に対して会社の通販サイトのデザインや企画を学びながら、実践する機会をインターンシップとして提供している。2つのゼミナールの中で、希望する学生が参加しており、通販向けに若い女性目線での商品のアピールやデザインのブラッシュアップに貢献している。2024 年からは、社内の別部署からの要請で学生有志がパンの開発に関わる会議に出席するようになった。

このように、(株)東北協同事業開発と本学との産学連携は、当初の商品の共同開発から様々な活動が展開して、会社の事業上の関係性の広がりや、大学の実践教育の充実などが図られる結果となっている。

3. 卒業生のアンケートから見る「古今東北」の取り組み

3.1. アンケート集計結果

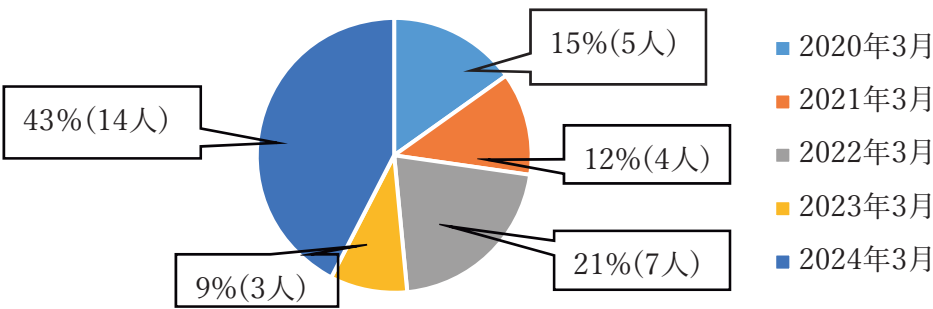
古今東北事業部との連携事業を行った後、本学科の宮原ゼミ・渡部ゼミに在籍して活動を行った学生は、2020年3月の卒業生以来、5学年99名に及ぶ。今回、学生時代の「古今東北」の活動についてどのように感じていたか、卒業後に社会人として反映されているか、について調査するべく、アンケート調査を行った。

アンケート調査の実施概要は図表 3.1、アンケート内容は付表のとおりである。

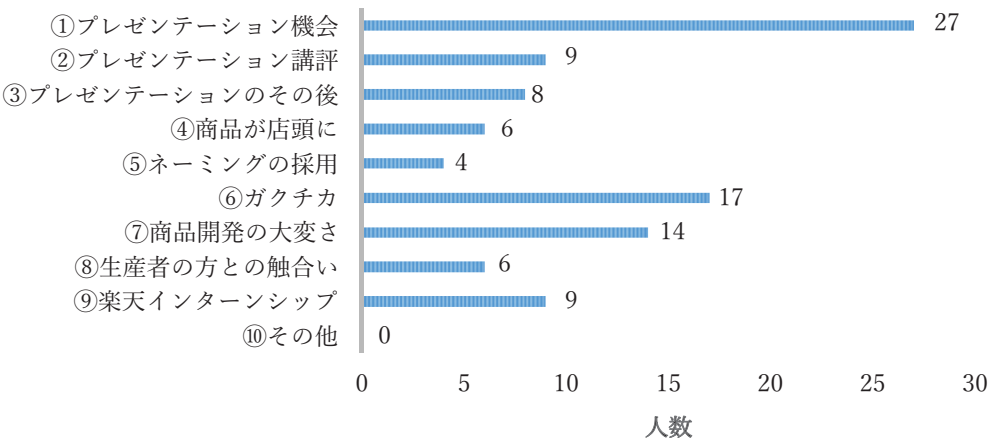
以下、設問ごとの調査結果について述べる。

図表 3.1 アンケート調査方法

調査期間	2024 年 9 月 17 日から 10 月 31 日
調査ツール	Google Forms
回答者数	33 名



図表 3.2 【設問 1】卒業年について



図表 3.3 【設問 2】商品開発活動で印象に残ったこと

図表 3.2 は、回答者の内訳である。5 年間の活動に参加した卒業生の 33.3% から回答が得られた。内訳をみると、昨年度（2024 年 3 月卒業）の回答者が一番多く、43% を占めている。

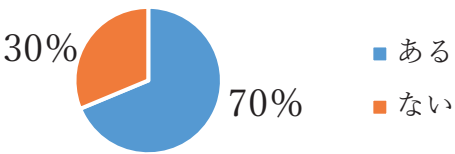
次に、学生時代にかかわった「古今東北」の商品開発に関する活動について、印象に残った事柄について、複数回答可で質問した結果が、図表 3.3 である（実際の回答選択肢は付表参照のこと）。

最も回答数が多かったのは、①「古今東北の商品を自分たちで考えて提案したり、他のグループのプレゼンテーションを聞く機会があった」という選択肢で、27 人であった。これは、全体の 84.4% に相当する。

2 番目に多かったのは、⑥「就職活動の時に、学生時代に力を入れたことの説明で役に立った」いわゆるガクチカと呼ばれるもので、17 人（53.3%）であった。次に多かったのは、⑦「商品開発の過程を見て、その大変さを実感した」という項目で 14 人（43.8%）であった。

このほか、②「プレゼンテーションに対しての様々な視点からの講評を聞くことができた」、および⑨「楽天のインターンシップにかかわることができた」という項目についても、9 人（28.1%）ずつ選択している。

第 3 の設問は、「古今東北のプロジェクトにかかわった経験は、現在の社会人としての活動に影響を与えていると感じることはありますか？」であった（図表 3.4）。7 割の学生が「ある」と答えており、「ある」と答えた回答者に対し、どのような点が影響したか答えてもらった記述が図表 3.5（抜粋、原文ママ）である。



図表 3.4 【設問 3】 社会人としての活動への影響

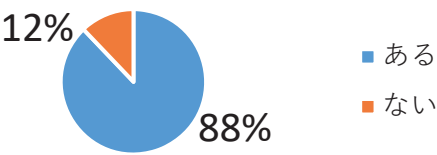
図表 3.5 【設問 4】 社会人としての活動へ影響した点（自由記述、抜粋）

自由記述
楽天のインターンシップに参加をし、実際自分たちで作成した商品ページやインスタでの広告効果が、どう売上に繋がっていくのか具体的な数値で確認することができた。今は業種的には全く関係のない職種に着いたが、ビジネス商談会というイベントにて古今東北の皆さんと一緒に会社同士の繋がりを持つことができています。
地域に貢献したいという思いがより強くなった
プレゼンを行った経験から、お客様への提案や説明などどのように行うと分かりやすく伝わるのか考える力がついたこと、緊張せずに話すことができるようになったこと
消費者としてほしい商品と企業として作りやすい商品という両社の考え方が必要であるということ学びました。その経験は今もユーザーと自社/クライアントの間で双方が納得できる形を提案する際の考え方の基礎になっていると思います。
自ら考えアイデアを出す力がついた点

楽天インターンシップとは、ゼミ生のうち、希望者（各年各ゼミ概ね2名ほど）が、楽天のウェブサイトにおける「古今東北」の商品販売に、インターンシップとしてかかわらせていただいたことを指す。

設問5では、卒業後、「古今東北」の商品を身近な人に勧めたり、自分で購入したかどうかについて尋ねた（図表3.6）。この結果からは、9割近い卒業生が「古今東北」の商品を身近なひとに勧めたり、自分で購入していることが分かる。設問2において、⑧「生産者の方々と触れ合うことができて、商品の価値に気が付いた」を選択した回答者は、すべて「はい」と答えており、学生時代に商品価値に気が付くことがその後の消費行動にもつながっていると考えられる。

最後の質問は、「今後、古今東北のプロジェクトにかかわった経験をどのように生かしていきたいと思うか」という問いであった（図表3.7、抜粋、原文ママ）。実に様々な回答が見られ、しかも積極的に生かしたい気持ちが伝わってくる内容である。



図表 3.6 【設問 5】卒業後の「古今東北」商品とのかかわりあい

図表 3.7 【設問 6】今後活かしていきたい経験（自由記述、抜粋）

自分で考えたことを人を巻き込んで実践したり、人脈を広げることの大切さを学んだので、今後の仕事で活かしたい
商品開発ではプレゼン、インターンではネット販売を経験し、そこから取り込めたことが多くありました。今でもその経験から生かしていることがあります。これからの業務でも学べたことを生かせるようにしていきたいです。
生活の中で地域産業を意識した購買をしていきたい。
顧客目線に立ってより良いサービスを提供していくこと
商品開発でなくても考え方のプロセスを学べてよかった
古今東北のファンなので、これからも購入したり、他人におすすめしたりしたい。
学生のうちに社会人の方と一緒にプロジェクトを行い、実際に商品化出来たことは社会を知る上でとても勉強になったし商品開発という仕事の魅力を知ることにつながった。今の業務となかなか結びつけることは難しいが、さまざまなアイデアを提案したりプレゼンしたりする力は身についたと思うので、さまざまな場面で活かしていきたい。
商品の魅力をどう伝えるか、どうすれば購入してもらえるのか、をたくさん考えた2年間でした。それが現在は銀行員として会社や個人事業主を支援する形に変わりましたが、特色やアピールポイントを見つけ外に発信して行く、事業の継続・発展に繋げていくためのベースの考え方は古今東北のインターンで学んできたものであると思っています。
これからの長い人生に役に立てるように、客観的に物事を見て、色んな意見を取り入れながら、生活していきたいです。

以上のアンケート結果からは、学生たちが活動を通じて学び取ったことが十分に読み取れるが、次節 3.2. においてその教育的効果を総括的にまとめてみたい。

3.2. アンケートから読み取れたこと

アンケートの設問 2 において、活動の印象として①のプレゼンテーションの機会をあげた学生が非常に多かった点については、欲しい商品を自分たちで考え意見をまとめて、プロの方に見ていただく機会を学生時代に得たことが、貴重な経験として心に残っているということであろう。また、⑥の就活で役に立ったとの回答も半数以上であった。サークル活動や勉強、アルバイトに精を出したことは、誰でも言えることであって、それ以外に、「古今東北」の商品開発活動を通じて人とは違う経験をできたと感じたこと、それが自分の自信となって面接時にアピールすることができたことが大きいと言えよう。

設問 3 と設問 4 における、社会人としての活動への影響についての感想は、産学連携ができたからこそその感想であると考えられる。

実際、学生たちは、「古今東北」の商品を調べ、今まで商品化されていないが需要のあるものは何かを考え、そのターゲットとなる年齢層や販売価格について考え、場合によってはパッケージやネーミング、その商品素材を生かした応用的な利用方法についても考えて提案してきた。提案後には、学生投票の形で、何が「古今東北」の商品として相応しいかを票決したが、その時点で得票数の多かった提案の商品が必ずしも商品化されてきたわけではなかった。生産者、加工業者、流通のそれぞれの分野のハードルを越えて初めて商品化される過程を知ることができたのは、プレゼンテーション後に東奔西走してくださった㈱東北協同事業開発の丹野部長をはじめ、ご協力いただいた方々のおかげである。その過程を見ることができたのが、印象に残っているということだと思われる。また、インターネット・ショッピングに関する EC サイト画面の作成などにかかわれたことが、学生にとっては貴重な経験となった。

卒業後の「古今東北」の商品とのかかわりあいと今後活かしていきたい経験について問うた設問 5 と設問 6 では、プレゼンテーションやインターンシップの経験、消費者としての目線が社会人としての活動に役立ったという実感があることが良くわかる。提案するために、どのような商品が求められるか考え、効果的なプレゼンテーションについて検討し、その先の商品開発にかかわり、そのすべてが地域について再考していく社会人生活の基礎になっていると言えるであろう。

4. 産学連携事業の教育的効果と課題

4.1. 大学側「学」としての教育的効果と課題

「古今東北」商品開発にかかわる活動の大学側から見た教育的効果は、アンケート結果を考慮に入れると、大きく次の 3 点に要約できるであろう。

1 番目は、大学の座学だけでは体得できない、ビジネスの仕組みに触れる経験をすることができたという点である。現代ビジネス学科では、「理論と実践の往復」として、座学を通じてビジネス

全般に関する知識と理論を学びつつ、プロジェクト型学習を意識したゼミナールを通じて、社会人として必要とされる「社会人基礎力」を養うことを教育の特徴の一つとしている。「古今東北」の商品開発は、座学でも学ぶことが多くあったが、座学だけでは学べない、社会人としての基本的な姿勢や考え方も学ぶ非常に良い機会を与えていただいた場であった。また、このような環境を素直に受け止め、自分たちの中に力として蓄えていった学生たちの柔軟な感受性を、当該アンケートを通じて知ることができたことも大変喜ばしい点である。

2 番目は、地域社会への意識を向上できたことである。「古今東北」は、2011 年の震災を契機に地域の復興を目指してできたブランドであり、2 年生が実践活動を始めるにあたって、毎年この点を丹野部長にご説明いただいていた。プレゼンテーション、途中経過、試食、商品化の過程を通して、「地域」に貢献したいという思いを持つ学生が少なからずいることが分かった。産地や生産事業者の方への訪問も、一助となっていると言えるであろう。

3 番目は、消費者としての意識の高まりである。企業側の丹野部長が、常に女子学生の年代の目線をととても大事にしてくださり、学生の意見に耳を傾けてくださったことは、学生たちにとっても大変自信となることであり、思ったことを言える環境を付与していただいた点で、大変ありがたいことであった。彼女たちが社会人となって、商品やサービスを売る側になったときに、消費者の目線に立って考え、自分も消費者として行動する立場で「古今東北」の商品を広めようとしている点で、学生時代の活動が効果的に発現していると思われる。

教育現場の課題としては、毎年入れ替わっていく学生に、先輩たちの意識を継承できるか、継承していくためにはどうすればよいか、ということを常に考えていく必要があるという点があげられる。

4.2. 事業者側「産」としての教育的効果と課題

さらに、この産学連携の取り組みに関し、連携先である㈱東北協同事業開発の丹野部長と鈴木課長にもヒアリング¹を行った。

実質的に活動を始めた 2017 年から、毎年、年度初めに、学生に対して丹野部長からは「古今東北」のブランドについて理念や経緯を伝えていただく講義をしていただいていたが、それが㈱東北協同事業開発としても理論的な根拠を磨くきっかけになっている、とのことであった。また、それまでの「古今東北」商品の顧客層は主婦層であったが、本学との連携を通じて、若い世代にも受け入れられる商品の開発をすることになり、対象が広がったとのことであった。本学との連携活動は、地域の大学や学生の活動への貢献であり、それは生協の存在意義の一つである地域社会への貢献の一局面ととらえていたためであったということも、伺って有難いと思った点である。

加えて、「古今東北」楽天サイトのインターンシップやペーカリー部門の開発会議を通して学生の多様な意見を聞いたことを、良かった点として認識していただいていた。

また、丹野部長には「特にインターンシップ等でかかわった学生については、最初の年に学習してから商品についての理解が進み、卒業のころには、主体的に『古今東北』の商品をどのように育

¹ 2024 年 11 月 15 日（金）10:00-11:20、仙台市八乙女にあるみやぎ生協文化会館においてお話を伺った。

成すべきかを考えてもらえるようになった」として、教育的効果を認識していただいていた。プレゼンテーションについても、毎年学生は新しく参加するが、先輩の活動を継承し、提案内容や項目も増え、より深い考察が加えられ、プレゼンテーション前に試作品を作る活動に広がるなど、進化が見られたことも話題となった。

学生が提案した商品がすべて開発されるわけではなかったこと、「古今東北」の商品は、こだわりが強く、店頭より宅配に向く傾向があることから、学生が目にする店舗での品ぞろえが少ないことを課題として挙げていただいた。

ただし、学生たちが「古今東北」の商品に関する活動を行い、商品化されたパッケージには学生の写真がプリントされていることもあり、家族や近い人たちが当該商品に興味を持つきっかけになったのではないかという点を評価していただいた。

おわりに

文部科学省の産学連携は、数百万円から数億円にも及ぶ国の補助金を伴う大型の取り組みが想定されているが、本学本学科における㈱東北協同事業開発との産学協定は、限られた資金のなかで、多くは㈱東北協同事業開発のご厚意により進めることができた活動である。そして活動の中核は、震災によってダメージを受けた東北の生産者と消費者を、災難復興の1回限りのお見舞いとすることなく、有機的・草の根的に結ぶことであり、それを学生たちの年代、視点、目線で考えてみるという機会を与えていただいた。学生たちは、生まれた地域や今住んでいる地域について改めて顧みる大変良い経験ができたと考えている。

㈱東北協同事業開発の丹野部長からのお話で、連携活動には、本学のみならず、双方にメリットがあったことが分かったことも有意義であった。震災の記憶を継承しつつ、学生たちが生き生きと活動できる環境を維持し、今後とも出来得る限り、息の長い復興支援としてこの活動が続けていけるよう尽力していきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、㈱東北協同事業開発の丹野潤一取締役開発・営業部長をはじめ、斎藤拓次営業課長（元）、鈴木智昭開発担当課長、みやぎ生協のみなさまに、2017年以降、大学教育に対して多大なご理解とご協力を賜り、また、今回、ヒアリングにもご協力いただいたことに深謝いたします。本事業のきっかけを作ってくださった、宮城学院女子大学OG、東通インテグレート㈱代表取締役佐藤博美さまもここに記してお礼申し上げます。

参考文献

西村一郎（2021）『あしたへつなぐ おいしい東北 古今東北のチャレンジ』合同出版株式会社, 178-190.

宮城学院女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科（2021）『MG おうちで COCON レシピ集』2021年3月, 70pp.

宮城学院女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科（2022）『MG おうちで COCON レシピ集 2』2022 年 3 月，
72pp.

宮城学院女子大学現代ビジネス学部現代ビジネス学科（2023）『MG おうちで COCON レシピ集 3』2023 年 3 月，
71pp.

みやぎ生活協同組合（2020）「MG おうちで COCON レシピコンテスト開催！」『COOP SCOOP』2020 年 9 月号，Vol.3，
8-9.

みやぎ生活協同組合 HP「概要」

<https://www.miyagi.coop/outline/gaiyou/>（2024 年 11 月 5 日閲覧）

文部科学省（2003）新時代の産学官連携の構築に向けて．文部科学省科学技術・学術審議会技術・研究基盤部会資料 4.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu8/toushin/03042801.htm（2024 年 11 月 5 日閲覧）

りらく（2023）「宮城学院女子大学現代ビジネス学部生考案 古今東北商品を使用したオリジナルレシピ」『りらく』
2023 年 4 月号，第 25 巻第 9 号，Vol.296，58-89.

付表

在学時における(株)東北協同事業開発様との古今東北商品開発に関するアンケート

1) 卒業したのはいつですか？

- ① 20 年 3 月 ② 21 年 3 月 ③ 22 年 3 月 ④ 23 年 3 月 ⑤ 24 年 3 月

2) 古今東北の商品開発にかかわった経験のうち、印象に残っていることは何ですか？（複数回答可）

- ① 古今東北の商品を自分たちで考えてプレゼンテーションしたり、他のグループのプレゼンテーションを聞く機会があったこと
② プレゼンテーションに対しての様々な視点からの講評を聞くことができたこと
③ プレゼンテーションした商品が、その後、生産・加工・流通の段階でどうなったか（商品化したものもしなかったものも）を聞くことができたこと
④ 自分たちの写真が入った古今東北の商品が、店頭に並んだこと
⑤ ネーミングを考えた案が一部採用されたこと
⑥ 就職活動の時に、ガクチカ（学生時代に力を入れたこと）の説明で役に立った
⑦ 商品開発の過程を見て、その大変さを実感した
⑧ 生産者の方々と触れ合うことができて、商品の価値に気が付いた
⑨ 楽天のインターンシップにかかわることができた
⑩ その他（自由記述）

3) 古今東北のプロジェクトにかかわった経験は、現在の社会人としての活動に影響を与えていると感じることはありますか？

- ① ある
② ない

4) 3) で①ある、に回答したかたへ。それは、どんな点ですか？

（自由記述）

5) 卒業後、古今東北の商品を身近な人に勧めたり、自分で購入したことはありますか？

- ① ある
② ない

6) 今後、古今東北のプロジェクトにかかわった経験をどのように生かしていきたいと思いますか？

（自由記述）

